

ここまで進んだ！最先端のがん医療

主催／静岡新聞社・静岡放送

共催／県立静岡がんセンター、三島市、長泉町、裾野市、函南町、清水町、三島市民文化会館

特別協賛／スルガ銀行

静岡がんセンター公開講座2023「ここまで進んだ！最先端のがん医療」(静岡新聞社・静岡放送主催、県立静岡がんセンター、三島市、長泉町、裾野市、函南町、清水町、三島市民文化会館共催、スルガ銀行特別協賛)の第3回(事前登録制)がこのほど、同会館で行われました。第3回は県立静岡がんセンターゲノム医療推進部遺伝カウンセリング室の浄住佳美氏が「がんと遺伝の関係を知る」、同センター消化器内科部長の山崎健太郎氏が「最先端の大腸がん薬物治療」と題して講演し、ネット配信も行いました。会場では同センターの上坂克彦総長と浄住氏、山崎氏による質疑応答・タウンミーティングも開催。その概要をまとめました。

〈企画・制作／静岡新聞社地域ビジネス推進局〉

最先端の大腸がん薬物治療

大腸がんは、わが国のがんの中で罹患(りかん)者数が最多ですが、治る患者さんが多いがんでもあります。大腸がんとは大腸の内側の上皮(粘膜)から発生する悪性腫瘍のことです。初期の自覚症状はほとんどありません。進行すると便秘、下痢、血便、しこり、残便感などが出てきます。そこで大切なのが検査です。よく集団検診で行われるのが「便潜血反応検査」。前処置不要という長所がありますが、偽陽性や見落としの可能性があります。このほか、発見率が高い全大腸内視鏡検査もあります。もし、血便など気になる症状がある場合は、精密検査をお勧めします。敬遠する人が多いとされる大

罹患患者数が最多 検診の受診が大切



県立静岡がんセンター
消化器内科部長
やまざき けんたろう
山崎 健太郎 氏

1999年札幌医科大卒。2006年静岡がんセンター消化器内科副医長、10年同医長を経て21年から現職。日本臨床腫瘍学会協議員、日本癌(がん)治療学会総務委員会専門委員、西日本がん研究機構理事・消化器グループ副委員長などを務める。

腸カメラも、近年では検査器具も改善され、軽い麻酔薬を使用したりと、検査のつらさはかなり減ってきています。コロナ禍で検診の受診率が減少しています。検診はぜひ受けるようにしてください。

薬の併用療法で効果が2倍以上に

大腸がんの病期は、がんが粘膜層にとどまっているのをステージ0とし、深く潜っていくにつれてⅠ、Ⅱと進みます。リンパ節転移があればⅢ、他臓器への転移があるとⅣと診断されます。標準治療にはがん細胞を切除する手術、一部の直腸がんの術前治療や症状緩和のために行なわれる放射線治療、再発予防や手術が困難な場合に使われる薬物の治療があります。

遺伝子検査で 薬の効果や副作用を予測

切除不能な場合、最新の薬物療法の基本はゲノム医療と免疫療法の導入です。分子標的薬は、がん細胞に特有の働きをするタンパク質を標的に殺細胞性抗がん薬よりもがん細胞に特化して作用します。万人に奏効するわけではなく、がん種によって効果が異なります。そこで、効果や副作用を予測する遺伝子検査「コンパニオン検査」を行

います。遺伝子変異の有無によって抗がん薬の効果が見込まれると判断されれば、分子標的治療薬や免疫療法が行われ、変異が期待できない方は従来の治療となります。大腸がんで治療標的となる遺伝子変異にはKRAS、RAS、BRAF、MSIなどがあります。MSI-Hの遺伝子変異が認められると、免疫チェックポイント阻害薬が選択されます。頻度は100人に4人程度と少ないですが、適合すれば高い効果が期待できます。また、RASとBRAFの遺伝子変異がなければ、抗EGFR抗体薬の効果が期待できます。一つ一つの遺伝子変異に対して治療適用が年々増えつつあります。さらに、切除可能な大腸がん

薬物療法に用いられる薬の種類には、殺細胞性抗がん薬、分子標的薬、免疫チェックポイント阻害薬(ICI)があります。殺細胞性抗がん薬はがん細胞に加え、正常な細胞にも影響を与える薬です。分子標的薬は、特定のがんに特徴のある標的に対しての治療薬です。

正しい情報から 取捨選択が大切

遺伝情報は有用な情報ですが、特に生まれつきの遺伝情報

Q お尻をティッシュで拭く時に血が付いたり、血便が出たりすることがあります。クリニックでは痔(じ)ではないと診断されましたが、この症状は大腸がんとは区別できるのでしょうか。また、座薬を使うと排便時には細くなりますか。

山崎 痔と大腸がんとで血便の違いはありません。直腸で出血した場合、痔でもがんであってもきれいな赤い鮮血が出ますが、上行結腸や横行結腸など、大腸の奥の出血になると、赤黒い色の血になります。また、座薬は腸内で溶けてしまうため、便が細くなることもないと思います。便が通過していくところに異物があると、通過障害となって便が細くなることが考えられますので、まずは大腸カメラによる精密検査を受けることをお勧めします。

の薬物療法にも、遺伝子検査の有用性が報告されつつあります。特に術後の血液検体の遺伝子変異を調べることで、再発の予測につながります。わが国でも「CIRCULATE-Japan」というプロジェクトが進行しています。術後1カ月から定期的な血液検査を行うことで、再発の早期発見、術後の抗がん剤治療の省略といったことが可能になる可能性があります。頻度は2、3%と少ないですが、MSI-Hの切除可能な直腸がんでは、術前の免疫チェックポイント阻害薬療法で手術を回避できる可能性が報告されています。将来的にごく一部ではありますが薬物療法のみによって大腸がんが根治できる時代が来るかもしれません。

がんと遺伝の関係を知る

先天的にがんになりやすい「遺伝性がん」

遺伝子とは、私たちの体を作り維持するために必要な「設計図」です。遺伝子は約2万数千種類あるといわれ、この遺伝子のわずかな変化が、身体的特徴以外に病気のなりやすさにも関係しています。さまざまな役割をもつ遺伝子のうち、細胞の増殖をコントロールする「がん関連遺伝子」に、化学物質やウイルス感染などの環境の要因で変化が起こると、細胞の増殖をコントロールできなくなり、がん化しやすくなるのです。また、先天的にがん関連遺伝子に変化をもち、特定のがんになりやすい「遺伝性がん」体質の方もいます。

遺伝性がんは若年発症の傾向があり、1人で複数のがんが全体で、遺伝性がんの割合は約5%です。一例として、BRCA1、BRCA2遺伝子に病的な変化をもつHBOCの場合、一般的なリスクと比較して乳がんは約6、7倍、卵巣がんは約10、40倍、前立腺がんは約2倍、膀胱がんは約4、5倍発症しやすいといわれています。そのほか、大腸がんや子宮体がんになりやすいリンチ症候群も知られ

体質に合わせた治療・対策を検討

近年、すべての遺伝情報(ゲノム情報)を用いて、がんの最適な治療、予後予測、発症予防を行う「がんゲノム医療」が始まり、がん細胞がもつ遺伝子の変化をターゲットにした、分子標的薬と呼ばれる薬剤も開発され、治療に使われています。薬剤の適応を調べるために遺伝子を解析し、遺伝性がんの診断につながる場合もあります。

自分の遺伝情報を知ること、がん発症の不安が増す可能性もありますが、現在は2人に1人はがんになる時代で、病気がただけではありません。自分と大切な家族を

Q 大腸がんの治療方法を決めるためにMSI検査をしたところ、MSI-Hであると言われました。MSI-Hの場合、遺伝性がんのリンチ症候群と関連があると聞き、心配です。

浄住 細胞が分裂してDNAをコピーする時、一定の確率でミスが起こりますが、それを修復してくれるのがリンチ症候群の原因遺伝子です。リンチ症候群の方はこの修復作用が十分働かず、コピーのミスが蓄積してがんにつながります。MSI-Hだとリンチ症候群の可能性がありますが、リンチ症候群ではなくてもMSI-Hを示すことがあります。MSI-H大腸がんの場合、リンチ症候群の可能性は50%以下です。リンチ症候群診断のための追加検査については、個別にご家族の状況などを伺いながら相談させていただいています。



県立静岡がんセンター
ゲノム医療推進部遺伝カウンセリング室
きよすみ よしみ
浄住 佳美 氏

2012年お茶の水女子大学大学院博士前期課程修了。14年静岡がんセンター入職、18年から現職。20年同大学院学術博士。遺伝カウンセリングとして、がん遺伝外来で遺伝性腫瘍症候群の遺伝子検査をはじめ、がんと遺伝に関する相談全般に対応している。

発症、血縁者に特定のがん発症が多いといった特徴があります。米女優アンジェリーナ・ジョリーさんが、遺伝性乳がん卵巣がん(HBOC)であることを公表し、予防のために乳房などを切除したことは、世界中で話題となりました。

報にはいくつかの特性があります。まず「不変性」。生まれつきの遺伝情報は生涯変化しません。次に「予測性」。将来の病気の発症を予測できる場合があります。そして「共有性」。血縁者間で遺伝情報の一部を共有しています。このような情報が不適切に扱われた場合、結婚など社会的な側面への影響が生じる可能性があります。最後が「不確実性」。遺伝子の変化と病気の関連が明確でなく、役立つ情報が得られない場合もあります。

がんから守ることができる可能性もあります。遺伝子の検査を受ける場合、ご自身やご家族にとってのメリット・デメリットをよく考えてください。大切なのは正しい情報を得ること。その情報から、ご自身に必要な情報を取捨選択して、がん予防・早期発見のための適切な対策を立てて実行していくことが必要です。

自分の遺伝情報を知ること、がん発症の不安が増す可能性もありますが、現在は2人に1人はがんになる時代で、病気がただけではありません。自分と大切な家族を

当院のがん遺伝外来では、臨床遺伝専門医と遺伝カウンセリングが遺伝情報に関する相談を受け付けています。患者さんだけでなく、ご家族のみの相談もできますので、担当医やよろず相談窓口などにお申し出ください。